

独居の高齢者宅 安全に

笠松町が松波総合病院、岐阜医療科学大と連携



独居高齢者への支援事業を始める(左から)古田聖人町長、松波英寿松波総合病院理事長、山岡一清岐阜医療科学大学学長＝笠松町役場

火災や転倒の危険箇所点検

笠松町は2026年度、1人暮らしの高齢者の不慮の事故を防ぐため、危険箇所を早期に見つけて対策する「すまいの安心診断」を始める。町内で高齢者の独居家庭での火災や転倒事故などが後を絶たないことから、民間病院や大学と連携し住み慣れた自宅で安全に暮らせるよう手助けする。

(安井真由子)

町によると、同町の人口に占める65歳以上の割合は25年度が27・2%。町内では24年12月と25年3月に続けて高齢者の独居世帯で火災が発生し、25年3月の火災では住民の90代の女性が亡くなった。町内ではほかにも室内で転倒したことから介護認定につながったケースや、大量の物が室内外に放置される「ごみ屋敷」問題などがあるという。

高齢者を地域一帯となつて支えるため、町は昨年12月に松波総合病院(同町)、岐阜医療科学大(関市)と包括連携協定を締結した。専門的な視点で高齢者宅を点検し、事故の要因を早期に見つける。

町地域包括支援センターが選定し同意を得た家庭に、センター職員と町防災担当者、病院からは理学療

法士らリハビリ専門職が訪問し、同看護学部が学生も参加。火災につながる恐れがある配線でないかや避難経路の確認のほか、転倒やヒートショック対策を講じる。訪問後はフレイル(虚弱)予防教室を案内するなど、健康増進にもつなげる狙い。

今月からモデルケースとして1世帯で実施し、新年度から本格化する。古田聖人町長は「1人暮らしで困りごとを抱える高齢者が増え、地域のつながりも希薄となる中、三位一体で取り組みたい」と話した。